

## ベネッセ教育総合研究所との意見交換会の実施について

岐阜市は、平成 28 年 2 月 23 日に、ベネッセ教育総合研究所との間で「包括的研究推進等に関する協定」を締結しました。この度、協定第 2 条（連携・協力内容「継続的な意見交換」）に基づき、第 3 期岐阜市教育振興基本計画に関わる論点を議題として意見交換会を実施しました。この意見交換会の結果を取りまとめた本書は、岐阜市教育振興基本計画検討委員会の資料として活用されます。

論点は、これまでの岐阜市教育振興基本計画検討委員会の議論を踏まえて岐阜市教育委員会が設定しました。以下、出された意見の概要を論点ごとに記載します。

### ■論点 1：子どもの「やってみたい！」を育む教育のあり方や大人の関わり方について

#### （岐阜市や社会の現状に関する示唆）

- コミュニティ・スクールは小学校ではうまくいくことが多いが、中学校では難しい。その理由として親との距離ができたり、部活で忙しくなったりすることが考えられる。子どもの「やってみたい！」を育むときに課題となるのも中学校ではないか。
- 学習内容の増加など、子どもに様々なものがオンされている時代になっている。同時に、なぜそれを学ばなければいけないのかなど、学ぶ文脈を理解できないまま与えられるものが多くなっている。
- 学習が全体として失敗しないように組み立てられている。それが、子どもの学びに対する主体性に影響を与えているのかも知れない。

#### （大人の関わり方）

- 親の関わり方が子どもへの影響が大きい。
- 大人の関わり方は難しいテーマだ。関わり過ぎても関わり過ぎなくてもよくない。
- 大人が、子どもにとってやった方がよいと思うことを直接的に指示してしまうより、それによってどんな良いことがあるのかを伝えていけると良い。
- 親などの大人が、子どもの上位者ではなく、一緒に調べたり考えたりする関係でも良い。
- シニアが子どもへの接し方を磨く講座について、講座の状況を録画してどのように関わり方、働きかけが変わったかを捉えられると良い。
- 幼児期の教育において重要なことの一つとして、関わる大人が子どもに対して発問することがあげられる。「これをやりましょう」ではなく、「なんだろう？」と聞いてあげる。
- パッションに影響を与える要素について何が働きかけるのか。キーワードは二つで、「面白い」と「カッコいい」だ。中学生は特に「カッコいい」ということが大事。また、「面白い」という点もファニーであると同時にインタレスティングでなければならない。知の興奮があるかどうか。この2点があるとパッションにつながっていくのではないか。

#### （学校や教員の関わり方・あり方）

- 教員の力量にかかってくる部分は大きい。子どもたちの意欲向上の仕組みなど、学校現場や授業の中で実践されなくてはならない。我々にとって、赤ペン先生のように人の役割が重要なと同様である。

- アクティブ・ラーニングは、先生がどう発問するかを重視するものだ。
- 塾へ行ったり、問題集を買って解いたりすることによって、テストで点数を取ることに注力する方法はある。一方、公立学校の授業で何に軸足を置くか。学校で何ができるのか。多様な価値観を認めることが重要だ。スローラーナーとファーストラーナーが共に学ぶ学校だからこそできることがあるはずだ。
- ICT を活用して教員が子どもをほめるきっかけを提供したり、子どもの学びの経過を観察できたりするなどの支援ができるとうい。

#### (教員の指導力向上に関する示唆)

- 学校種別間（幼保小中高など）の交流など、指導観の異なる教員間の交流が思考を活性化する良い影響となるかもしれない。
- 他県の教員との交流などが同質性の打破には効果的だ。

#### (パッション・モチベーション)

- 学力によってモチベーションのあり方も異なるため、アプローチの仕方が異なる。例えば、学力が低位にある子どもに対しては、まず自信をつけさせるためにテスト範囲を指定して、勉強すれば必ず点数が取れるようにしてあげる。それを続けることで学習習慣を身に付けさせる。学習習慣が身に付けば次のステップに行けるはずだ。
- 学力が上位の子どもに対しては、好奇心と危機意識は大きな要素。「このままではまずい」という危機意識は当人を動かす大きな原動力となる。

### ■論点 2：施策の改善を図るための目標や指標のあり方

#### (目標・指標の捉え方)

- 岐阜市としてどういう教育を目指すのかという「目的」がまずある。その下位に「目標」があり、さらにその下位にアウトプット（事業を実施した実績等）がある。目的をどのように捉えるかが大切。
- 指標は一つのツールとして捉えるのが良い。指標が目的や目標の全てを測っていないことを前提として、指標をどのように使うかを考えたほうが良いのではないか。
- ある地方公共団体では、指標を市民と会話するためのコミュニケーションツールとして活用していた。仮置き指標をいくつか設定し、これを大切にしているというスタンスを示すものとして用いていた。
- 指標の設定においては、まず、全ては測れないという前提を持つこと。その上で代表的なものは何かを見極めること。数値だけを追いかけ始めると、施策が“対策”になってしまう。
- 評価指標は測定可能でなければ失敗してしまう。前提として、運用可能なものでなければならない。
- 指標の数値を取ることにどれだけの意義があるのかは注意深く見ていく必要がある。評価のための評価になってしまう恐れがあるので、まずは、岐阜市の教育を良い方向に変えていくためにデータを使うという視点が重要だ。

**（成果と指標の関係性）**

- 成果（アウトカム）の測定には多様な変数に関わることになる。教育の施策は、これをやったから子どもが劇的に変わったということは、我々もあまり経験していない。個々の子どもが変わる事例はあるが、全体でどうなったかというのは様々な変数が相互に関わっているため断定しにくい。目標や指標の設定による施策の改善は理想論として分かるが、現場が運用することを考えると難しい面も多い。

**（施策の改善に向けた示唆）**


- 5 年間は長すぎるのかも知れない。2、3 年のスパンで仮置き目標を作って短いスパンでそれを検証していく方法もある。
- 学びの効果・成果は急に出ないため長期的な目標は必要だが、短いスパンで実践して改善を積み重ねることが重要だ。
- 岐阜市の教育施策に関する取組み状況を市外の人にはなかなか把握しづらい。そうすると、施策を実際に享受している人の評価が大切になる。その人たちの声を少しでも受け取りながら、施策を改善していけると良い。

**論点 3：プログラミング的思考を育む教育手法や効果の測定**

**（プログラミング“的”思考）**

- 「プログラミングをやる」ということと、「プログラミングで学ぶ」ということについて現場に混乱が見られる。様々なツールがあるが、それを使う授業があったとしても、使って終わりになってしまうようなケースが散見される。この分野は、今、教育界全体の課題となっている。
- 例えば Pepper を用いて何をすることが大切。「動かし方」と「何ができるか」は別で、義務教育として何をどこまでやらせたいのかまで含めて、ツールの選択からカリキュラムまでをトータルで考えられると良い。
- ツールの使い方を覚えることが目的ではなく、それは経験として理解できれば良いこと。その先にある、例えばロボットを使って何をしたいかを考えられる子どもたちを育てると良いのではないか。
- 先生方も含めて、なぜプログラミング教育をやらなければならないのか理解できると良い。今の学びが何につながるのかを理解したうえで学ぶことが重要。

**■意見交換会に出席頂いた方**

	谷山所長、木村副所長（調査研究領域）、小泉副所長（情報発信領域）、加藤グローバル教育研究室長、中垣カリキュラム研究開発室長
○「子どもは未来」の理念の下に子育て・教育環境を統合的に捉えた研究と社会への発信を目的に、1980 年発足の研究機関を統合し、ベネッセ教育総合研究所として設立（2013 年）。専属の研究員を 40 名規模で擁する教育分野の一大シンクタンク。	

※岐阜市教育委員会からは、原教育委員会事務局次長兼教育政策課長以下 4 名が出席しました。